

吐露

真中哲郎

地理学教室創設五十周年、真におめでとうございます。五十年と言えば半世紀。戦後まもない大阪で、地理学教室をつくり育てあげた先輩、先生方に感謝します。そんな歴史の重さ・厚みなど、一向に気にも留めなかった、若い私の二十才からの三年間は、地理学教室なしには語れません。

そもそも私は、大阪市立大学を地理学科がある、ということと受験した人間であり、学科選択の際にも、友達の動きを気にすることなく、これしかない決めておりました。

私の家族、特に父親の影響で私は、兄と共に地図を見て、時刻表を広げ旅行計画を練ったり、自転車で遠出したみたりと、幼い頃からの旅好きでした。そんな私が成長して、大学へ行くのなら、あちこち行って地図を読み、野外調査する、それもかなり自由なテーマで自分の好きなことをしていただける学部・学科がいいと思い、文系地理を目指したのです。

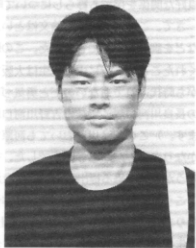
さて、地理学科に籍を置いてからの三年間は私の人生の中で最も内容の濃い旅を重ねた、今思うとあっけない程の日々でした。

地理学科での旅行といえば、皆さんご存じの春・秋に行われる巡検が思い出されます。私が二回生の時の春の巡検は、奈良・郡山が行先でした。先輩方が様々なテーマで発表され、それに対する先生方は鋭い質問を投げかけ、さすがは大学生と、遠足気分だった私を驚かせてくれました。それでも秋の巡検となると、泊まりかけの遠出と言うことでのんびりと観光の要素もあり、また夜の宴会では、後々までも語り継がれる意外な芸達者もいて思い出深い夜になりました。

三回生になり、自分達が発表する巡検になるとテーマの決定、資料集め、聞き取り、文章化と一転して大変な大仕事だとわかりました。先輩や先生方と相談しながらテーマが次第に形になっていく過程は、後になって、大学生生活の集大成である卒業論文作成の予行演習だったと気付きました。（その経験を完全に活かしかれたかどうかは怪しい限りですが。）ちなみに私達の巡検は、春が地元大阪、秋が紅葉の美しかった秋田でした。私の選んだテーマは大阪の黒門市場・秋田八郎潟の漁業で、この頃から、どっぷりと趣味の世界に没り、魚と漁業それも淡水でのそれにばかり目を向けていました。

ところで、これは正規の巡検ではなかったのですが、私が非常に大きな衝撃を受けた旅行が三回生の3月、1996年にありました。中村教授の退官記念ベトナム巡検がそれです。その時まで、まさか私が海外に行くなど考えてもみなかったため、海外旅行というだけで興奮し、行先が大好きな作家・開高健が三度も訪れた国であるということで様々な期待に胸を膨らませていました。この旅行での経験・思い出は一晚語っても語り尽くせない程で、この旅に参加できたことを本当に幸せに思います。

ベトナムにおいても私は、魚ばかり追いかけて、市場があればすかさず何度も足を運び、さらには持参した竿とルアーで雷魚釣りまで試みるはしゃぎ様でした。釣竿片手の一人旅ということでは、大学



在学中に四国の吉野川、四万十川、淡路島、北陸などに行き、水と人との暮らしぶりを肌で感じ体験することができました。また、卒業論文制作にとりかかっていた四回生の夏には、院生の加藤先輩の案内で揖斐川、長良川、輪中地帯を見て回り、その後は一人でテントをかついで長良川沿いに十日間の旅行をしました。この十日間での経験は、私の中で今なお生き続け、川べりの生活、水と魚と人が良好な関係を保てる暮らしについて時折考えます。

さて、こんな私の卒業論文とはいえば当然ながらテーマは絞られ、紀ノ川の淡水漁業の過去・現在などを調べることにしました。この時も嬉しかったのは、先程の加藤先輩や山野教授が興味を示してくれたことで、特に山野先生は大阪での淡水漁撈について調べておられ、私の選んだテーマが、あなたが時代遅れでもないのだと勇気づけられました。（今考えれば時代遅れでも何でもなく、それ以前の長良川河口堰、現在の吉野川河口堰など川と人との問題は常に考えていなければならないと気がきます。）この紀ノ川においても河原でテントを張ったり、地図を片手に堤防をひたすら歩いたり、かなり楽しみながらの調査でした。その為、最終的に出来上がった論文は、はたして学術的なものだろうかと恐る恐る提出したことを憶えています。

こうして趣味と学業を両立（一体化？）させ続けた私も、卒業することができ、社会に出ることになりました。ここで重要な人物を紹介しましょう。ご存じの方もいることと思いますが、その人は同回生の女性で、共にベトナムのニョクマムと香草と雷魚を経験し、紀ノ川のすぐ側に住んでいました。

（私の卒論テーマと彼女の住所についての関係は深く穿鑿しないで下さい。）彼女と出会ってからの私は、一人での放浪旅行ではなく、普通の観光などの目的をもつ旅行をするようになり、就職についても定収入を得られる職を探すことにしました。ところが、私はやはり私であり、見つけた仕事があると、川魚を専門に扱う、しかも市場（商店街）の卸・小売の店だったので、よくそこまでこだわり続け、見事にその仕事を見つけたものだと自分でもあきれ、笑ってしまう程です。

こうして仕事を始め、はやくも三度目の夏を迎えました。毎日、ウナギやアユ、ニジマスやドジョウと戯れています。ところで今年の夏は忙しく、好きな旅行にも行けず、プールで泳ぐ暇さえありません（私は元水泳部）。それというのも、いよいよ彼女との結婚が決まりその準備に追われているのです。これで、私の水と共にある人生も幾分落ちつくかと思いきや、新しい二人の家はなんと、木津川の堤防まで歩いて約十分という地に決まったのです。こうなると毎日川を見に行けて、キャンプもでき、釣りもできると夢のような暮らしになるかもしれません。

さて、果たして私（と彼女）の未来はどうなることが、今までが順調すぎて少々不安にもなります。しかし地理学教室に在籍して、そこで経験したこと、出会った人達、あふれんばかりの思い出、そして結婚相手の女性との出会いまで、私はこれからもそれらを心の大黒柱にして水と共に力強く生きてゆきたいと思います。

こんな水臭い男を受け入れ、育ててくれた地理学教室に心から感謝し、さらなる発展を願います。

1999年、私の最愛の季節に

蚊に喰われつつ

（平成9年卒業）